



楽しいこと

と

川崎ゆきお

「楽しいことを作ることですなあ」

「それが長澤さんの健康法ですか」

「さあ、どうだか、何をどうしても寿命には勝てんでしょ。天寿は何かは分かりませんがな、あっちへ行くことに変わりはない」

「その間、健康でいる方が良いですよ」

「生きてりゃ健康じゃよ」

「あ、はい。それで話を戻しますが、楽しいことを作るとは、どういうことでしょうか」

「知ってるくせに」

「ああ、はいはい」

「言ってみなさい」

「ストレス解消じゃないですか。ストレスが万病の元とか言われていますから、少しでも楽しいものを増やしたほうが良いという意味で」

「楽しいことを考えることは、そういう段取りじゃなくてのう。楽しいから考えるのじゃよ」

「辛いことは考えないようにするとか」

「面倒臭いから考えんだけの話だよ。まあ、暗いこと、心配事もあるがよ。森もあれば、木もある。林もあるだよ」

「カレーだけじゃなく、ハヤシも」

「あはは、そうじゃな。そんなのは普通に思えばいい。その中で、楽しいことを思うのは楽しいだろ。それだけのことじゃわい」

「たとえば病気になって苦しいときがありますねえ」

「ああ、だから、小さな楽しみを見付けるのよ」

「たとえば」

「歌を聴いたりとか」

「あ、はい」

「こういうときに聴く歌は良いぞ。わしは三橋美智也と春日八郎が好きでなあ。孫がダウンロードして持ってきた」

「ああ、ユーチューブとかにあるんですよ」

「あまり古いと駄目だけど、テレビでやっていたような歌なら、あるんだとか」

「懐メロ番組などを録画したものですよね」

「あれは桂小五郎だね」

「はあ」

「だから、頭が桂小五郎なんだ。それがおかしくておかしくて」

「ズラですね。はいはい」

「だから、そういうのを見たり聞いたりするのを楽しみにしておる。普通じゃないかい。そんなこと。だから健康法でも何でも無いわい」

「でも、辛いこと、辛いことをずっとやらなければいけないときがあるでしょ」

「当たり前じゃないか」

「ああ、はいはい。そ、そんなときは」

「そんなときなあ。そんなときは君、その中で楽しいことを見付ける」

「苦しいのにですか」

「ずっと苦しいわけじゃないだろ」

「そうですね」

「少し楽になったときが楽しいし、それが終わったら、今度は島倉千代子を聴こうとか、そういうお楽しみを予約しておく」

「良い方法ですねえ」

「しかし、美味しいものを食べすぎると飽きてくる。だから、楽しみは取っておくのもいい。いざというときに在庫豊富な方が良いだろ」

「はい。プラス思考で良いと思います」

「何がプラスじゃ。マイナスも楽しめるのだぞ」

「ああ、はいはい」

「わしの今の楽しみはのう。こういうインタビューが苦痛なので、君の揚げ足を取るのを楽しみにしておるんじゃ。まだやるかい」

「ああ、いえいえ」

「君も誰かから頼まれてこんなインタビューに来ているんだろうが、因果だねえ」

「いえいえ」

「君の楽しみは何だい」

「考えたことありませんが、キャンプカーのようなのを買って、しばらく旅行に出ることです」

「あ、そう。そんな大技じゃなくても、楽しみは転がっているから」

「はい、有り難うございました」

了